

第 30 回日本医療薬学会年会実施報告書

第 30 回日本医療薬学会年会

年会長 山田 清文

名古屋大学医学部附属病院 教授・薬剤部長

事業名： 第 30 回日本医療薬学会年会

主催者名： 一般社団法人日本医療薬学会年会

年会長： 山田清文(名古屋大学医学部附属病院 教授・薬剤部長)

会 頭： 奥田真弘(大阪大学医学部附属病院 教授・薬剤部長)

後 援： 一般社団法人日本病院薬剤師会、公益社団法人日本薬剤師会
一般社団法人愛知県病院薬剤師会、一般社団法人愛知県薬剤師会
日本薬科機器協会

実施日程： 2020 年 10 月 24 日(土)～11 月 1 日(日)※オンラインを利用した Web 年会

年会の趣旨

第 30 回日本医療薬学会年会を 2020 年 10 月 24 日(土)～11 月 1 日(日)の 9 日間、オンライン年会として開催した。当初は、名古屋国際会議場での通常開催を予定していたが、新型コロナウイルス感染症の拡大防止と年会参加者の安全を第一に考え、日本医療薬学会としては初めての試みであるオンライン年会として開催することになった。

第 30 回年会のメインテーマは、「患者と医療を支える薬剤師力を磨く」とし、超高齢社会において疾病構造は大きく変化する一方、医学薬学の進歩に伴い、先端医療が次々と日常診療の中に組み込まれ、診断・治療法は多様化・高度化している。こうした社会・医療環境の変化に対応するためにチーム医療の推進と多職種連携、タスクシェア・シフトが求められており、薬剤師には患者と医療を支える確かな専門性が必要なる。また、有効で安全な薬物治療を実現するためのコミュニケーション力、交渉力、実行力なども必要であり、新しい治療法の開発に貢献するためには研究力も必要です。これら薬剤師に求められる専門性と能力を含めて「薬剤師力」と呼ぶことにした。

本年会では、薬剤師力を「診療」「教育」「研究」「社会貢献」の 4 つの観点から議論し、令和の時代に求められる薬剤師像について考える機会として、上記 4 つの分野のトップランナーを特別講演、教育講演にお招きした。公募シンポジウムには 112 件の提案があり、委員会提案シンポジウムと合わせて合計 140 のシンポジウム案の中から最終的に 63 のシンポジウムを採択した。また、コロナ禍での演題募集にもかかわらず、一般演題は口頭発表 266 題、ポスター発表で 1,014 演題を採択した(国際セッションを含む)。その他、International Symposium(国際シンポジウム)、緊急企画シンポジウム、ワークショップを実施した。

本年会は、Web 開催サイトの視聴はオンライン視聴の他、アプリでも可能とし、同サイトから動画視聴、抄録閲覧を可能とするなど、便利性の向上に努めた。シンポジウム・一般演題には質疑応答機能を装備し、活発な議論の場を提供した。また、日病薬病院薬学認定薬剤師制度の研修単位シール対象の 71 セッションの他、多くのライブセミナーも開催されることから聴講者数が非常に多くなることを想定し、配信環境の整備の向上に努めた。

会費等の設定

参加費	会員	非会員	学生(会員)	学生(非会員)
事前参加登録・ オンライン参加登録	10,000 円	18,000 円	無料	3,000 円

事業内容

1. メインテーマ 『患者と医療を支える薬剤師力を磨く』
2. 年会長講演 1 題
3. 会頭講演 1 題
4. 特別講演 4 題
5. 教育講演 5 題
6. International Symposium(国際シンポジウム) 2 セッション
7. 緊急企画シンポジウム 2 セッション
8. シンポジウム(公募) 63 セッション
9. ワークショップ 1 セッション
10. 一般演題 1,280 題
 - 1) 口頭 266 題
 - 2) ポスター 1,004 題
 - 3) International Session 10 題
11. メディカルセミナー 31 セッション

参加者数:

	正会員	非会員	学生(会員)	学生(非会員)
事前登録	4,326	524	103	21
当日登録	3,173	1,003	10	16
計	9,176			

運営組織:

年会長 山田 清文 名古屋大学医学部附属病院
 事務局長 永井 拓 藤田医科大学

<組織委員>

石川 幸伸	公益社団法人静岡県薬剤師会	永津 明人	金城学院大学
岩月 進	一般社団法人愛知県薬剤師会	灘井 雅行	名城大学
賀川 義之	静岡県立大学	西井 政彦	一般社団法人三重県薬剤師会
川上 純一	静岡県病院薬剤師会	林 秀敏	名古屋市立大学
木村 和哲	一般社団法人愛知県病院薬剤師会	原田 均	鈴鹿医療科学大学
谷村 学	三重県病院薬剤師会	日比野 靖	一般社団法人岐阜県薬剤師会
吉村 知哲	岐阜県病院薬剤師会	村木 克彦	愛知学院大学

(敬称略・五十音順)

<プログラム委員>

網岡 克雄	金城学院大学	鈴木 匡	名古屋市立大学
板倉 由縁	碧南市民病院	寺町 ひとみ	岐阜薬科大学
岩本 卓也	三重大学医学部附属病院	内藤 隆文	浜松医科大学医学附属病院
大井 一弥	鈴鹿医療科学大学	永井 拓	藤田医科大学
亀井 浩行	名城大学	野田 幸裕	名城大学
北市 清幸	岐阜薬科大学	平松 正行	名城大学
木村 和哲(兼)	名古屋市立大学病院	宮崎 雅之	名古屋大学医学部附属病院
斎藤 寛子	愛知医科大学病院	山田 成樹	藤田医科大学病院
鈴木 昭夫	岐阜大学医学部附属病院	脇屋 義文	愛知学院大学

(敬称略・五十音順)

<実行委員>

石塚 雅子	名古屋大学医学部附属病院	鳥本 真由美	名古屋大学医学部附属病院
太田 小織	名古屋大学医学部附属病院	永井 拓(兼)	藤田医科大学
片岡 智美	名古屋大学医学部附属病院	丹羽 洋介	名古屋大学医学部附属病院
加藤 博史	名古屋大学医学部附属病院	藤野 泰孝	名古屋大学医学部附属病院
加藤 善章	名古屋大学医学部附属病院	溝口 博之	名古屋大学医学部附属病院
久保田 亜希	名古屋大学医学部附属病院	宮川 泰宏	名古屋大学医学部附属病院
熊倉 康郎	名古屋大学医学部附属病院	宮崎 雅之(兼)	名古屋大学医学部附属病院
阪井 祐介	名古屋大学医学部附属病院	森 智子	名古屋大学医学部附属病院
清水 久美子	名古屋大学医学部附属病院	矢野 亨治	名古屋大学医学部附属病院
千崎 康司	名古屋大学医学部附属病院	山本 雅人	名古屋大学医学部附属病院

(敬称略・五十音順)

事業成果

第30回日本医療薬学会年会を2020年10月24日(土)～11月1日(日)の9日間にわたりオンラインにて開催した。当初は、2020年9月20日(日)から22日(火・祝)にかけて名古屋国際会議場・ANAクラウンプラザホテルグランコート名古屋での通常開催を予定していたが、新型コロナウイルス感染症の拡大防止と年会参加者の安全を第一に考え、オンライン年会として開催することにした。本学会としては初めての試みであるが、通常の集合型学会と比較して時間や経費の負担が軽減され、オンデマンドで視聴できるというメリットもある。一方で、オンライン年会としたため、懇親会と市民公開講座の開催は断念した。参加者は約9,200名に及び、1日平均のログイン件数は3,000件を超えた。

本年会のテーマは「患者と医療を支える薬剤師力を磨く」とした。超高齢社会において疾病構造は大きく変化する一方、医学薬学の進歩に伴い、先端医療が次々と日常診療の中に組み込まれ、診断・治療法は多様化・高度化している。こうした社会・医療環境の変化に対応するためにチーム医療の推進と多職種連携、タスクシェア・シフトが求められており、薬剤師には患者と医療を支える確かな専門性が必要となる。また、有効で安全な薬物治療を実現するためのコミュニケーション力、交渉力、実行力なども必要であり、新しい治療法の開発に貢献するためには研究力も必要である。これら薬剤師に求められる専門性と能力を含めて「薬剤師力」と呼ぶことにした。特別講演1では、名古屋大学医学部附属病院の小寺泰弘病院長が「胃癌治療ガイドラインにみる胃癌の薬物療法」と題して、胃癌の薬物療法の歴史を振り返り、進行・再発胃癌の治療、補助療法についてご講演いただいた。

特別講演 2 では、厚生労働省の山本史審議官が「令和の薬剤師に期待する一変化する社会と医療の中で、未来に向けて」についてご講演いただいた。特別講演 3 では、塩野義製薬株式会社の手代木功代表取締役社長が、「医療の将来を見据えた製薬企業の社会貢献」と題して、医療全体の将来を見据えた製薬企業の進むべき方向性をご紹介いただき、社会への貢献という面からの製薬企業から薬剤師への期待と願いについてご講演いただいた。特別講演 4 では、東京大学・大学院薬学研究科の池谷裕二教授が、「医療と薬理学—AI の現在と未来を考える」と題して、創薬科学と医療分野における機械学習の応用の最近の傾向をご紹介いただき、将来的に社会構造や人間行動がさらに最適化されて人類の幸福度と生産効率が共存できる未来を見据えていることをご講演いただいた。教育講演 1 では、名古屋大学大学院医学系研究科の尾崎紀夫教授が「ゲノム医療の現状と今後の方向性」と題して、がん、難病及び精神疾患に関してゲノム医療の現状を外觀し、ゲノム医療推進に向けた研究と人材育成・体制整備の方向性についてご講演いただいた。教育講演 2 では、慶應義塾大学医学部の谷川原祐介教授が、「個別化医療：TDM vs ゲノム医療」と題して、個別化投薬は遺伝子シーケンスと TDM という新旧技術の得手不得手を相互補完し統合化された投薬アルゴリズムを作り上げた時に完成することをご講演いただいた。教育講演 3 では、和歌山県立医科大学の松原和夫教授が、「ある日の薬剤師業務が永遠の薬剤師業務ではない」と題して、今後も薬剤師の職能を拡大し、医療の中で活躍できるようになるためには、薬剤師の介入によって患者の明らかな臨床的アウトカムを引き出すことが重要であると講演いただいた。教育講演 4 では、名古屋市立大学大学院薬学研究科の服部光治教授が、「アルツハイマー治療薬の現状と未来」と題して、アルツハイマー病の病態の基礎と、治療薬開発の問題点および将来における治療の可能性についてご講演いただいた。教育講演 5 では、名古屋大学医学部附属病院の長尾能雅教授が「医療事故から患者を守る一薬剤師とともに」と題して、有事と平時の患者安全業務の全体像を概説いただき、業務の連動と薬剤師の役割についてご講演いただいた。

公募シンポジウムには 112 枠の提案があり、委員会提案シンポジウムと合わせて合計 140 枠のシンポジウム案の中から最終的に 63 枠のシンポジウムを選定した。メインテーマの「診療」「教育」「研究」「社会貢献」の観点からバランスが取れた構成とし、病院薬剤師のみならず、薬局薬剤師、大学、企業からの参加者が聴講できる内容とした。緊急企画として「新興感染症に対して医療者はどう対応すべきか—COVID-19 の経緯を踏まえて—」、「コロナ禍に対応した実務実習の取り組み」と題して、2 枠のシンポジウムを開催した。国際交流として International Symposium「Efficient and productive pharmacist profession in the future -Point of view of Pharmaceutical Care, Education, Research and Social Contribution-1, 2」と題して 2 枠(8 題)を開催し、中国、タイ、日本における薬剤師による取り組みについて紹介された。

コロナ禍での演題募集にもかかわらず、一般演題は合計 1280 題を採択することができた。海外からも 10 演題のポスター発表が行われた。初のオンラインでの試みであったため、本年会では優秀演題の選考は断念した。ワークショップは「ジェネラリストとしての薬剤師力を磨く(2)—実践！複合疾患を有する患者への薬学的アプローチ」と題して臨床能力の習得を目的として、複合疾患を有する患者の病態把握から薬物療法の設計までの一連のプロセスを実践形式で演習する企画が Zoom を利用して開催された。また、メディカルセミナーも 31 企画が開催され大盛況であった。

単位認定に関して、日本医療薬学会医療薬学専門薬剤師、がん専門薬剤師、薬物療法専門薬剤師、地域薬学ケア専門薬剤師の単位認定を行った。日病薬病院薬学認定薬剤師制度の研修単位シールの発行については 7,935 人が申請を行うことができたが、運営側としては聴講者のログ管理や再生速度変更などについて規程があるためにサーバーシステムの強化に追われた。日本病院薬剤師会が認定する「各専門領域の講習会」としても承認された。一方、日本薬剤師研修センターについては録画配信が単位として認められないことから、本年会では受講シールの発行は断念した。

不測の事態によりオンライン年会となったが、開催期間を 9 日間と延長することで参加者からは通常開催とは異なり時間に囚われずに多くの発表を聴講することができ満足したとの意見が寄せられた。年会発表者・参加者の熱意により、コロナ禍での開催となる初のオンライン年会で医療薬学の更なる発展に貢献することができた。反

省点としては、現地開催することができなかったために、懇親会、市民公開講座、優秀演題賞などの企画を断念したことを挙げる。大きな混乱もなく盛会のうちに終えることができたのは、日本医療薬学会理事会・事務局のご支援と、組織委員・プログラム委員・実行委員など多くの方々のご尽力の賜物であり感謝申し上げます。